

短歌三首を読んで



9月18日の毎日新聞20面、「毎日ぷらざ」欄に、知人の大西寿美さんの短歌を読んだ。

子や孫へつなぐ命の尊さよ ひ孫誕生の時を待ち待つ

頭にじーんと響いて目を閉じた。気が付いたら復唱していた。大西さんは日を数えてひ孫の誕生を待っているのかな。大西さんは、こうして歌に詠めるからいいなあ。自分にはその能力がないが、今更どうにもならない。大西さんが二重に羨ましい。

大西さんの短歌の余韻^{じょうじょう}の中、母・マツエの姿が脳裏に浮かんできた。そうか、家の1人孫七歌は、母マツエのひ孫なんだ。七歌は母・マツエを「おおばあちゃん」と呼んでよく懐いていた。母は「七ちゃん^{なな}」と呼んでいた。

おおばあちゃんは、平成23年7月20日に、三豊総合病院へ入院して、9月29日に帰らぬ人となった。満96歳に17日足りなかった。その間、私は昼食後に毎日病院へ行って、数時間にわたって色々なそれまでに聞いたことのない話を聞くことが出来た。

「盆明け頃には退院出来そうですね」と主治医が言われるほどに一時回復していた。その頃だったと思う。七歌が私に、「おおばあちゃんに会いたいから連れて行って」と私に言ってきた。

「七ちゃん見たら、おおばあちゃんがびっくりして喜ぶじゃろ。ようけ話して来いや」と言って車に乗せた。

七歌は上機嫌で車の中でも喋りどおし。病院でも喋りどおしだった。幼稚園での縄跳び話、おおばあちゃんはベッドに横になったまま顔を七ちゃんの方へ向けて、にこにこしながら聞いて

ている。先生の「用意、始め」で跳び始めて、次々とみんなが引っかかって



跳ぶのを止めてしまって、七ちゃんが1人だけ跳んでいると、「七歌さん、もう止める？」と言ってくる。

「引っかかるまで跳ばしてくれんのやからいかんわ」

「おおばあちゃん、今日は七ちゃんの話がようけ聞けて良かったのう。じゃあ、もう帰るわ」と、私が促してやっと帰途についた。

病院を出て数キロ走った辺りで、七ちゃんが告げた。

「おじいちゃん、お茶が飲みたい！」

「もう少し辛抱しい。家へ帰って飲もう」と、私は言ってしまった。途端に、3歳と7ヶ月の七歌は、座席から前の床へ下りて座り込んでしまった。真夏のこと、あれだけ喋れば喉も乾いたことだろう。コンビニで車を停めてお茶を買って2人で飲めばよかったのにと、今に後悔している始末である。と同時に、ひ孫の顔を久し振りに見て話を聞いていたおおばあちゃんの嬉しそうな穏やかな顔が浮かんでくるのであった。

七ちゃんとはこんなこともあった。忘れもしない。平成26（2015）年2月8日（土）のことである。この日は七ちゃんの6歳の誕生日だった。朝起きると大雪だった。こんな雪が今は懐かしい。朝食を終えて、こんな大雪じゃ何も出来んと寛^{くつろ}いでいると、七ちゃんがやって来た。「おじいちゃん、雪だるまを作ろう」と言う。見れば完全武装している。私も完全武装して外へ出た。大きな雪だるまを作り、それでは飽き足らず、「次はかまくらを作ろう」と言い出す。「七ちゃん、かまくら知っとんか。すごいのう。じいちゃん、作り方知らんが」と困った顔をした。「母ちゃんに作り方、調べてもらうわ」と言う。次々と遊ぶ知恵が働くものだと感心する。七ちゃんに両親とじいちゃん、ばあちゃんの、家族5人総出で、かまくら作りが始まった。完成したかまくらへ七ちゃんは1人入って出て来ない。12時のサイレンが鳴った。今まで見せたことのない靈妙不可思議な顔をし



て、かまくらから出て来た。雪は6歳の誕生日の最高の贈り物だった。

おおばあちゃんが健在であれば、七ちゃんと一緒にかまくらに入ったかもしれない、と思ったりした。父・一郎は、私が59歳の時、89歳で亡くなった。ひ孫・七ちゃんを知らない。

大西さんの短歌が、こんな懐かしいことまで、私に思い起こさせてくれたのだった。

次に高松市 森上笑子さんの短歌を読む。

か細かりし早苗は分蘖に日々励み 育つ稲田の実り間近し

我が家のたわわに稔った稲田に、「今年の8月の日照りの水入れは大変だったぞ」と、話しかけている自分が重なるのだった。

最後に、松家満子・選者詠を読む。

老いし脚を踏んばり岸の草を刈りぬ 心豊かに今宵眠らむ

ああこれは、ひょっとして私のことを詠んでくれたのかもと、錯覚してしまうほどに心に沁みてきた。今年はまた格別に草がよく伸びたなあ。田植え前から今日まで、殆ど毎日、どこかの草刈りをしていたように思う。妻は「草刈り機ほど有難いものはないなあ」と誠しやかに言う。その度に、草刈り機の無かった時代、父や母は鎌で刈っていたんだと、思い出すのだった。

下の句の「心豊かに今日も眠らむ」は、「今日もよく働いた。ゆっくり休みましょう」と体をいたわるねぎらいの言葉だろう。ただ私は87歳の高齢の身、三段刈りしなければならない高い大岸を刈るのに頑張り過ぎた月は、足の筋肉が引きつって、何度か目覚めてしまうことがある。そんな私への「ほどほどにして」との忠告であるのかもしれない。本に含蓄のある言葉である。

(令和8年10月1日)

